

自分探し



自分探し

目が覚めると、何か違和感があった。何か足りない気がする。何が足りないのだろうとあれこれ考えて、ようやく、そういえば自分がない、と気付いた。なんだか大変な事態に陥った気がして、僕は慌てて顔を洗って服を着替え、自分を探しに飛び出した。

しばらく走り回っていると、どうしたの？と声をかけられた。振り向くと、それは近所のおばさんだった。僕は答えた。

「自分を探しているんです」

言った瞬間、しまった、と思った。いなくなった自分を探すなんて、そんな異常な事態を理解してもらえとは思えなかったし、むしろ、自分の頭がおかしくなったと思われそうだったからだ。ところがおばさんはちょっと考えた後、納得したように、優しい目になって、そう、がんばってね、と言った。

いかにも理解したというようなその言葉に疑問を感じたけれど、しばらく考えて僕も納得した。きっとおばさんは一時期はやった、本当の自分を探すとか、やりたいことを見つけるとか、そういうような意味での「自分探し」という言葉と間違えたのだろう。実際のところ、僕が探している自分とはそんなものではないのだけれど。

それから三十分ほど探し続つづけて、ふと、探しているのは自分なのだと改めて思い出した。だとしたら、やみくもに探し回るよりも普段から僕がよく行く場所を探した方がいいのではないだろうか。

そう思って僕は、電車に乗った。僕がいつもぼんやりしたいときに行く、隣の駅の公園に行くためだ。

やはりそこに自分がいた。自分は、いつもの僕のようにお気に入りの場所に座って、ただ何をやるわけでもなく、ぼんやりとしていた。クビになったサラリーマンのようにかすんだ、やる気のない目でじっとしていた。

僕はせっかく自分を見つけたのに、まだ見つからないような気分になった。